

岩倉忠在地遺跡の発掘調査

同志社小学校屋内運動場建設に伴う発掘調査報告書

若林邦彦・辰巳陽一

1. 調査地点について

同志社大学歴史資料館では、2010年4月12日～2010年6月9日に京都市左京区忠在地町406(同志社小学校内)にて発掘調査を行った。同志社小学校の屋内運動場(現・吉峰館)の建設に伴って行われた。

建設地点に北接する京都市の公園領域では、そこがまだ同志社大学の校地であった1970年代後半に、施設立替などによって発掘調査が行われ、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭のものと考えられる土器や縄文土器の破片などが出土していた。また、当地点から叡山電鉄岩倉駅周辺にかけての地点で、同様に縄文土器や弥生土器片が出土することが、京都市文化財保護課によって確かめられていた。

また、1990年度に同志社高校理科館建設に伴って同志社大学校地学術委員会が発掘調査を行い、沼状地形に古墳時代～古代の土器片が少数散布する状況を確認している(『同志社高等学校理科館改築にともなう埋蔵文化財の調査』1991)。また、2004年度には同志社小学校建設に際して発掘調査が行われ、古墳時代初頭の竪穴住居8棟と土坑墓群が検出された(『岩倉忠在地遺跡』2006)。さらに、2008～2009年度には、同志社中学・高等学校校舎建設にともない、その南接地点を発掘調査し、古墳時代初頭の竪穴住居3棟と溝・井戸や多数の土器を検出した(『岩倉忠在地遺跡Ⅱ』2011)。

今回の建設地は、同志社小学校グラウンドの東接地点に位置し、古墳時代初頭の住居群などの広がりが残存している可能性があった。そのため、2010年4月～6月にかけて発掘調査を行った。調査地面積は約564㎡で、同志社大学歴史資料館准教授若林邦彦と調査員(嘱託職員)辰巳陽一が行った。

調査においては、機械掘削・人力掘削・写真測量を(株)国際文化財に委託して作業を行い、現地にて若林・辰巳が作業を指揮した。また、測量・遺構実測図作成作業に同志社大学・大学院学生(大本朋弥・柴田将幹・早川広子・堀寛之・平岩知奈美・三浦勇人)および、京都大学大学院生(山本亮)が参加した。

2. 調査の方法

【掘削作業】

今回の調査は、同志社小学校の校屋内運動場部分について行われた。調査区は建設地のうち、基礎部分によって地下約50cmの部分に、古墳時代の遺構面が残存する約600㎡程度の範囲にわたったが、地表面から約10～50cmの部分は、機械掘削によって堆積土を除去した。遺構面は、近世以後の耕作やグラウンド整備によってすでに削平されており、いわゆる遺物包含層は確認できない状態であった。そのため、機械掘削後の掘削面からすでに遺構が確認できる状態であった。機会掘削後、人力で遺構面精査を行うと、住居・柱穴・土坑・溝などが検出され、遺構埋土を人力で掘削することとなった。

【測量基準・地区割】

調査に際しては、国土座標を用いた地区割り設定を行った。国土座標系については、2002年度以後、日本測地系から世界測地系へと移行が行われている。今回の調査は新基準である世界座標系に即してすべての測量作業を行っている。今回の調査地は、この座標体系上においては、第Ⅵ座標系上に位置している。また、水準については、東京湾平均海水準面を基準とする標高を採用している。

この座標系に基づけば、当調査区は、 $X = -103365 \sim -103395\text{m}$ 、 $Y = -19365 \sim -19320\text{m}$ の範囲内に相当する。そこで、 $X = -103365 \cdot Y = -19320\text{m}$ を基点とした10mメッシュの地区割名称を設定して、調査を行った。同点を基準に、西側へ順に10mごとにA・B・C・D・Eの5区画、南側へ順に1・2・3・4の4区画の名称を与えた。各10m区画については、その組み合わせでA-1区・B-2区という呼称を与えた。

本文中にみえる各遺構の所在地情報は、この区画に基づいた表現である。また、調査に際して遺物取り上げを行った際には、各遺物ラベルにこの地区割り名称を記入し、遺物取上げ単位で行った出土遺物登録作業にもこの地区割り名称を用いた。したがって、本書に掲載されていない出土遺物についても、その資料に貼付された遺物ラベルや、収納データはこの地区割りを利用した記載がなされ、最低10m区画単位での出土位置情報が復元可能となっている。(図1)

【記録作業】

遺構情報の記録は、実測図と写真の2種類の方法を用いた。実測図については、一部を座標軸などに沿った基準線から手実測する手法をとったが、大半は(株)国際文化財による写真測量によって作成した。個別遺構の平・断面図に関しては最低1/10縮尺での実測精度を確保するようにし、遺構全体の平面図作成については、1/50縮尺の精度を保つようにした。

また、これとは別に、作業風景や遺構・遺物の検出状況、土層断面の情報などについては、35mm白黒、ブローニー版のカラーリバーサルフィルムおよびデジタル一眼レフカメラによって記録撮影を行った。

3. 調査成果

現在、調査地の現地表面の標高は96.820m～96.960m、基本的に北東部から南西部に向かって下がっていく地形を呈する。遺構面までの掘削深度は浅い箇所では約0.2m、深い箇所では約0.5mであった。基本層序は大別して3層に分けることができ、第1層はグラウンド整備に係る現代整地土で層厚0.1m～0.12m、第2層はその直下に堆積する0.1m～0.4m前後の中近世の耕作土層(遺物包含層)、第3層はこの耕作土層を除去して現れる基盤層である。ただし、北辺西部および南辺西部では第2層は見られず、第1層直下で第3層に達する。詳細な堆積状況については、調査区東壁の土層断面図(図2)に掲載している。

【検出された遺構と遺物】

調査は第3層を遺構面として実施し、北辺東西トレンチ部から東辺南北トレンチ部にかけて、および南辺東西トレンチ部に集中して遺構が検出された(図1・写真1)。遺物は、北辺から東辺にかけて検出した遺構からは古墳時代初頭のものしか出土せず、南辺で検出した遺構からは平安時代以降の



図1 調査地点と周囲の遺跡



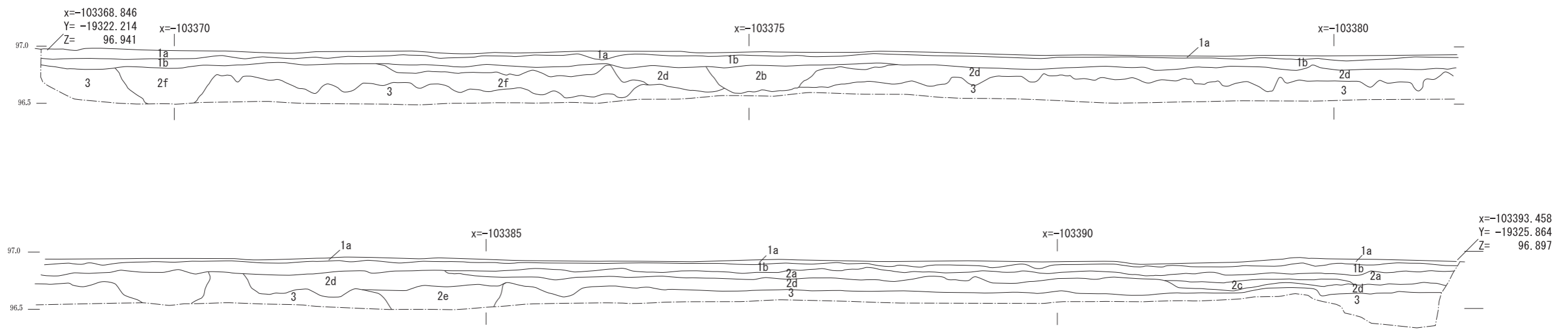
図2 遺構平面図 (1/200)

表1 検出された遺構

遺構種類	遺構番号	規模m(幅×長×深or径×深)	時期	地区割 (ex:「A-2」)	検出時の遺構埋土色・質	備考(他の遺構との 切合いなど)
落込み	001	7*5*0.2	不明	C-1 南東・ B-1 南西	7.5YR4/4褐色細粒砂、~ø5cmの礫15%含む	炭化物微量に含む
溝	002	0.8*2.2*0.4	不明	C-1 南東	5YR4/3にぶい赤褐色細粒砂、~ø3cmの礫7%含む	炭化物微量に含む
柱穴	003	0.3*0.2	不明	C-1 南東	7.5YR3/4暗褐色細粒砂、~ø5cmの礫3%含む	炭化物微量に含む
落込み	004	1.3*2.1*0.7	不明	C-1 南東・ B-1 南西	7.5YR3/3暗褐色細粒砂、~ø5cmの礫5%含む	5に切られる
柱穴	005	0.4*0.3	不明	C-1 南東・ B-1 南西	7.5YR3/4暗褐色細粒砂、~ø2cmの礫2%含む	4を切る
柱穴	006	0.3*0.2	不明	C-1 南東	7.5YR4/3褐色細粒砂、~ø2cmの礫2%含む	
柱穴	007	0.2*0.2	不明	C-2 北東	7.5YR5/2~4/2灰褐色細粒砂、~ø5mmの礫1%含む	
落込み	009	0.8*1.3*0.1	不明	C-2 北東・ B-2 北西	7.5YR5/3~5/4にぶい褐色中粒砂、~ø8cm礫2%含む。7.5YR5/1~5/2褐灰~灰褐粘土含む	攪乱か
落込み	011	1.0*2.1*0.6	不明	B-1 南西・ B-2 北西	7.5YR4/4褐色中粒砂、~ø9cm礫15%~20%含む	
柱穴	012	0.2*0.2	不明	B-2 北西	7.5YR5/4にぶい褐色極細粒砂、~ø5cm礫5%含む	
柱穴	013	0.2*0.2	不明	B-1 南西	7.5YR4/4褐色細粒砂、~1cmの礫1%含む	
竪穴住居 状遺構	014	6.3*3~*0.2	弥生末~ 古墳時代初頭	B-1 南西・ B-1 南東・ A-1 南西	7.5YR4/3褐色細粒砂、~ø5cm礫	炭含む。礫密集地あり。
落込み	015	1.7*6.1*1.3	不明	A-1 南西・ A-1 南東・ A-2 北東	7.5YR4/3褐色極細粒砂、~ø5cm礫7%含む	
柱穴	016	0.2*0.2	不明	A-2 北東	7.5YR4/3褐色極細粒砂、~ø2cm礫3%含む	
柱穴	017	0.3*0.2	弥生末~ 古墳時代初頭	B-2 北東	7.5YR4/3褐色極細粒砂、~ø3cm礫5%含む	
柱穴	018	0.2*0.2	不明	A-2 北東	10YR4/4褐色細粒砂、~ø1cm礫3%含む	
柱穴	019	0.2*0.2	不明	A-2 北東	7.5YR4/3褐色細粒砂、~ø7cm礫5%含む	
柱穴	020	0.3*0.2	弥生末~古墳 時代初頭	B-2 北東	7.5YR4/3褐色極細粒砂、~ø2cm礫2%含む	
柱穴	021	0.3*0.2	不明	A-2 北東	7.5YR4/3褐色細粒砂、~ø4cm礫7%含む	
柱穴	022	0.2*0.2	不明	A-2 南西	7.5YR4/4褐色極細粒砂	
柱穴	023	0.3*0.2	弥生末~ 古墳時代初頭	B-2 南東	7.5YR4/3褐色細粒砂、~ø2cm礫1%含む	
柱穴	024	0.2*0.2	弥生末~ 古墳時代初頭	A-2 南西	7.5YR4/4褐色細粒砂、~ø2cm礫3%含む	
柱穴	025	0.2*0.2	不明	A-2 南西	7.5YR4/3褐色極細粒砂、~ø3cm礫5%含む	
柱穴	026	0.3*0.2	不明	A-2 南東	7.5YR4/3褐色細粒砂、~ø2cm礫7%含む	
柱穴	027	0.3*0.2	弥生末~ 古墳時代初頭	B-2 南東	7.5YR4/3褐色細粒砂、~ø2cm礫1%以下含む	
柱穴	028	0.3*0.2	弥生末~ 古墳時代初頭	A-2 南西	7.5YR4/3褐色~4/4褐色極細粒砂、~ø3cm礫3%含む	
柱穴	029	0.2*0.2	不明	A-2 南西	10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂	
柱穴	030	0.2*0.2	不明	A-2 南西	7.5YR4/3褐色極細粒砂	
土坑	031	0.6*1.2*0.3	不明	B-3 北東・ A-3 北西	7.5YR4/3褐色細粒砂、~ø4cm礫15%含む	
土坑	032	0.6*1.2*0.3	不明	B-3 北東	7.5YR4/2灰褐色細粒砂、~ø5cm礫7%含む	
落込み	033	10*5~*0.2	不明	A-3 北西	7.5YR4/3褐色極細粒砂、~ø6cm礫1%含む	
柱穴	034	0.3*0.2	不明	A-3 北西	7.5YR4/3~4/4褐色極細粒砂、10YR4/3にぶい黄褐色粘土含む	
柱穴	035	0.3*0.2	不明	B-2 北西	7.5YR4/4褐色中粒砂、~ø3cm礫3%含む	
落込み	036	0.7*0.9*0.6	不明	B-2 北西・ B-2 北東	7.5YR4/3褐色細粒砂、~ø7cm礫5%、 7.5YR4/1褐色粘土含む	攪乱か

岩倉忠在地遺跡の発掘調査

遺構種類	遺構番号	規模m(幅×長×深or径×深)	時期	地区割 (ex:「A-2」)	検出時の遺構埋土色・質	備考(他の遺構との切合いなど)
柱穴	037	0.2*0.2	不明	D-1 南西	7.5YR5/1~6/1濁灰中粒砂、~ø1cm1%以下含む	攪乱
土坑	038	0.4*0.7*0.2	不明	D-1 北西	5YR4/2褐灰色~4/6赤褐色細粒砂、炭混じる	焼土。攪乱か。
柱穴	039	0.2*0.2	不明	D-1 北西	7.5YR4/2褐灰色~4/3褐極細粒砂、~ø5cm礫7%含む	土器混
土坑	040	0.7*0.9*0.6	不明	D-1 北西	10YR4/4褐色シルト、~ø5cm礫3%含む	
柱穴	041	0.2*0.2	不明	C-1 南西	7.5YR4/4褐色細粒砂、~ø10cm礫10%含む	
柱穴	042	0.2*0.2	不明	E-3 南東	10YR3/4暗褐色細粒砂、~ø1cm礫3%含む	
柱穴	043	0.2*0.2	不明	E-3 南東	10YR3/4暗褐色極細粒砂、~ø5cm礫1%含む	
柱穴	044	0.2*0.2	平安時代~ 中世	E-4 北東	10YR3/3暗褐色極細粒砂、~ø10cm礫3%含む	
柱穴	045	0.2*0.2	平安時代~ 中世	E-4 北東	10YR4/4褐色(砂混じり)ほぼシルト	
柱穴	046	0.2*0.2	平安時代~ 中世	E-4 北東	10YR3/4暗褐色極細粒砂	
柱穴	047	0.3*0.2	平安時代~ 中世	E-4 北東	10YR3/4暗褐色細粒砂、~ø1cm礫1%以下含む	
柱穴	048	0.2*0.2	平安時代~ 中世	E-4 北東	10YR4/4褐色細粒砂	49に切られる
柱穴	049	0.2*0.2	平安時代~ 中世	E-4 北東	10YR4/4褐色極細粒砂	48、50を切る
柱穴	050	0.3*0.2	平安時代~ 中世	E-4 北東	7.5YR4/4褐色細粒砂、~ø2cm礫1%含む	49に切られる
柱穴	051	0.3*0.2	平安時代~ 中世	D-4 北西	7.5YR4/4褐色細粒砂、~ø7cm礫1%以下含む	
柱穴	052	0.3*0.2	平安時代~ 中世	D-4 北西	7.5YR3/3~4/4暗褐色極細粒砂、~ø3cm礫1%含む	
柱穴	053	0.3*0.2	平安時代~ 中世	D-4 北西	10YR3/4暗褐色極細粒砂、~ø5cm礫3%含む	54を切る
落込み	054	0.5*0.7*0.2	平安時代~ 中世	D-4 北西	7.5YR3/4~10YR3/4暗褐色極細粒砂、~ø10cm礫5%含む。炭混じる	53、55に切られる
土坑	055	0.5*0.7*0.2	不明	D-4 北西	7.5YR4/4褐色細粒砂、~ø5cm礫3%含む	54を切る
柱穴	056	0.2*0.2	平安時代~ 中世	D-4 北西- 北東	7.5YR4/3~4/4褐色極細粒砂	
柱穴	057	0.2*0.2	平安時代~ 中世	D-4 北東	7.5YR4/3褐色細粒砂	
柱穴	058	0.2*0.2	古代~中世?	D-4 北東	7.5YR4/4褐色細粒砂、~ø4cm礫1%含む	
柱穴	059	0.2*0.2	古代~中世?	D-4 北東	10YR4/3にぶい黄褐色~4/4褐色細粒砂	
柱穴	061	0.3*0.2	古代~中世?	D-4 北東	7.5YR4/3~4/4褐色極細粒砂~ø4cm礫1%含む	
柱穴	062		古代~中世?	D-4 北東	7.5YR4/3褐色シルト	
柱穴	063		古代~中世?	C-4 北西	7.5YR3/4暗褐色極細粒砂、~ø3cm礫3%含む	
柱穴	064		古代~中世?	C-4 北西	10YR3/4暗褐色極細粒砂	
柱穴	065	0.3*0.2	古代~中世?	C-4 北西	7.5YR4/4褐色~10YR3/4暗褐色細粒砂、~ø3cm礫1%以下含む	
柱穴	066		古代~中世?	C-4 北西	10YR3/4暗褐色~4/4褐色細粒砂	
柱穴	067	0.3*0.2	古代~中世?	C-4 北西	7.5YR4/4褐色細粒砂	
落込み	070		不明	A-1 北東	7.5YR4/3褐色極細粒砂、~ø3cm礫3%含む	
落込み	072	0.2*0.2	不明	A-3 南西	7.5YR4/4~4/6褐色細粒砂、~ø1cm礫1%含む	
柱穴	073	0.2*0.2	不明	A-3 南西	7.5YR4/4褐色細粒砂、~ø3cm礫1%含む	
柱穴	074	0.2*0.2	不明	A-3 南西	7.5YR4/4褐色極細粒砂、~ø4cm礫5%含む	
柱穴	075		不明	C-1 北東~ 南東	10YR4/4~4/6褐色細粒砂、~ø3cm礫7%含む	
柱穴	076		不明	C-1 北東	10YR5/6黄褐色極細粒砂、~ø4cm礫1%含む	



1a層	Hue 10YR 6/6	明黄褐色砂層	
1b層	Hue 10YR 1.7/1	黒色砂層	
2a層	Hue 2.5Y 5/2	暗灰黄色シルト層 (ベース)	
	Hue 7.5YR 6/8	橙色シルト層 (ブロック状に入る)	小礫2%含む
2b層	Hue 10YR 5/2	灰黄褐色砂礫層	小~中礫25%含む
2c層	Hue 2.5Y 5/2	暗灰黄色シルト層	小礫1%含む
2d層 (北)	Hue 10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト層	小礫3%含む
2d層 (南)	Hue 2.5Y 5/2	暗灰黄色シルト層	小礫3%含む
2e層	Hue 10YR 5/3	にぶい黄褐色	小礫30%含む
2f層	Hue 10YR 4/4	褐色シルト層	小礫2~3%含む
3層	Hue 7.5YR 4/4	褐色シルト層	

図3 調査区東壁土層断面図 S = 1 / 40



写真1 調査区の全体



写真2 竪穴住居状遺構14

ものが主になっている。検出された遺構の詳細については、表1に記した。

地形が南辺部に比して高くなっていたために中近世の耕作によって破壊され、北部から東部にかけての区域には平安時代以降の遺構が残存していないと考えられる。何れにしても、今回の調査地では中世以降の生活遺構は認められず、当該期の当該調査地周辺は人間が居住するに適した土地ではなかったことを窺うことができる。

また、北辺部中央東寄りで竪穴住居状遺構14を検出している(図4・写真2)。平面規模は東西辺約6.5m、南北辺は南半約3.0m分を検出したが、北半部は調査区外へ延びるため、全体規模は不明である。残存状態は悪く、検出面から約5.0cm掘り下げたところで遺構底部に達する。また、壁溝および柱穴は検出されていないが、遺構底部のほぼ中央部に直径約1.5mの範囲で焼土と炭化物片の集中する箇所があり、炉跡およびそれに関連する部分と想定される。当該遺構が位置する地点では第2層中にも多量の炭灰および遺物が包含されていた。竪穴住居状遺構14底面からは、柱穴や壁溝が検出できなかったことから、断定はできないが、竪穴住居であった可能性が高い。

埋土や検出地点直上の層からは、土器片が多数出土した。図5と写真3にみえるように、短い柱状部から明確に外反する形態の高坏脚部(図5-1)や球胴化傾向をもちタタキメのうかがえる鉢・甕底部片(図5-2)がみられ、弥生時代後期末～庄内式併行期の土器と考えられる。また、受口形態で櫛描施文して胴部内面にヘラケズリのみえる鉢(図5-4)などは、琵琶湖沿岸部の庄内式併行期土器と共通する特徴をもっている。これらの土器は、2008、2009年度に同志社高校の校舎建設に伴って実施した調査での出土遺物と同時期のものと考えられる。

4. まとめ

今回の調査では、岩倉忠在地遺跡の東辺部の状態について窺うことができた。

まず、従来より竪穴住居群などが検出されている弥生時代末～古墳時代初頭の遺構・遺物群については遺跡全体の中で、広がりを確認することができた。今年度調査では、先述した竪穴住居状遺構を含む古墳時代初頭の遺物を共伴する遺構は調査地北東部に集中し、西半では当該期の遺構が皆無である。このことから考えると、遺跡内には東辺に当該期の生活域・居住域が形成されてことは確認できた。しかし、現在の同志社高校から同志社小学校以北の地域に営まれていた古墳時代初頭の集落からは一定の遺構空白地帯があることも明らかになった。既往の調査で判明したものは別の小生活集団が近接して存在した可能性も想定される。とすれば、岩倉忠在地遺跡の古墳時代初頭には複数の小集団が展開していて、単一集団による小規模集落ではなく、もっと規模の大きな集団形成を考えることが可能かもしれない。この問題は今後の課題としたい。

また、古代以後の遺構形成、特に平安時代の柱穴群が少なからずみられることも注目される。当遺跡では、2004、2008年度の発掘調査により奈良時代～平安時代の遺物遺構が断片的に検出されていたが、明確な集落の痕跡は確認できなかった。今回は柱穴群が確認されたことで平地式建物や掘立柱建物などが存在していた可能性も認められた。調査区内では明確な建物プランを特定することはできなかったが今後の調査の際は注意を要する点であろう。

参考文献

- 辰巳和弘編 1991『同志社高等学校理科館改築にともなう埋蔵文化財の調査』同志社大学校地学術調査委員会
 若林邦彦編 2006『岩倉忠在地遺跡－同志社小学校建設に伴う発掘調査報告書－』同志社大学歴史資料館
 若林邦彦編 2011『岩倉忠在地遺跡Ⅱ－同志社中学校・高等学校建設に伴う発掘調査報告書－』同志社大学歴史資料館



図4 竪穴住居状遺構 14 平断面図 (1/50)

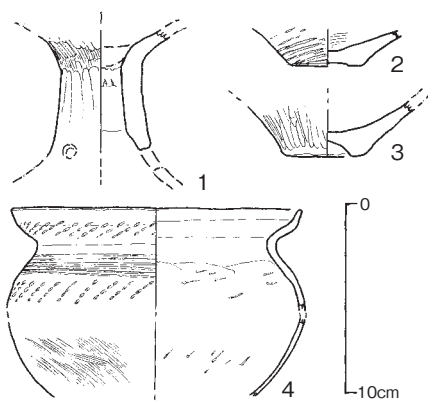


図5 竪穴住居状遺構 14 出土土器 (1/4)



写真3 竪穴住居状遺構 14 から出土した土器

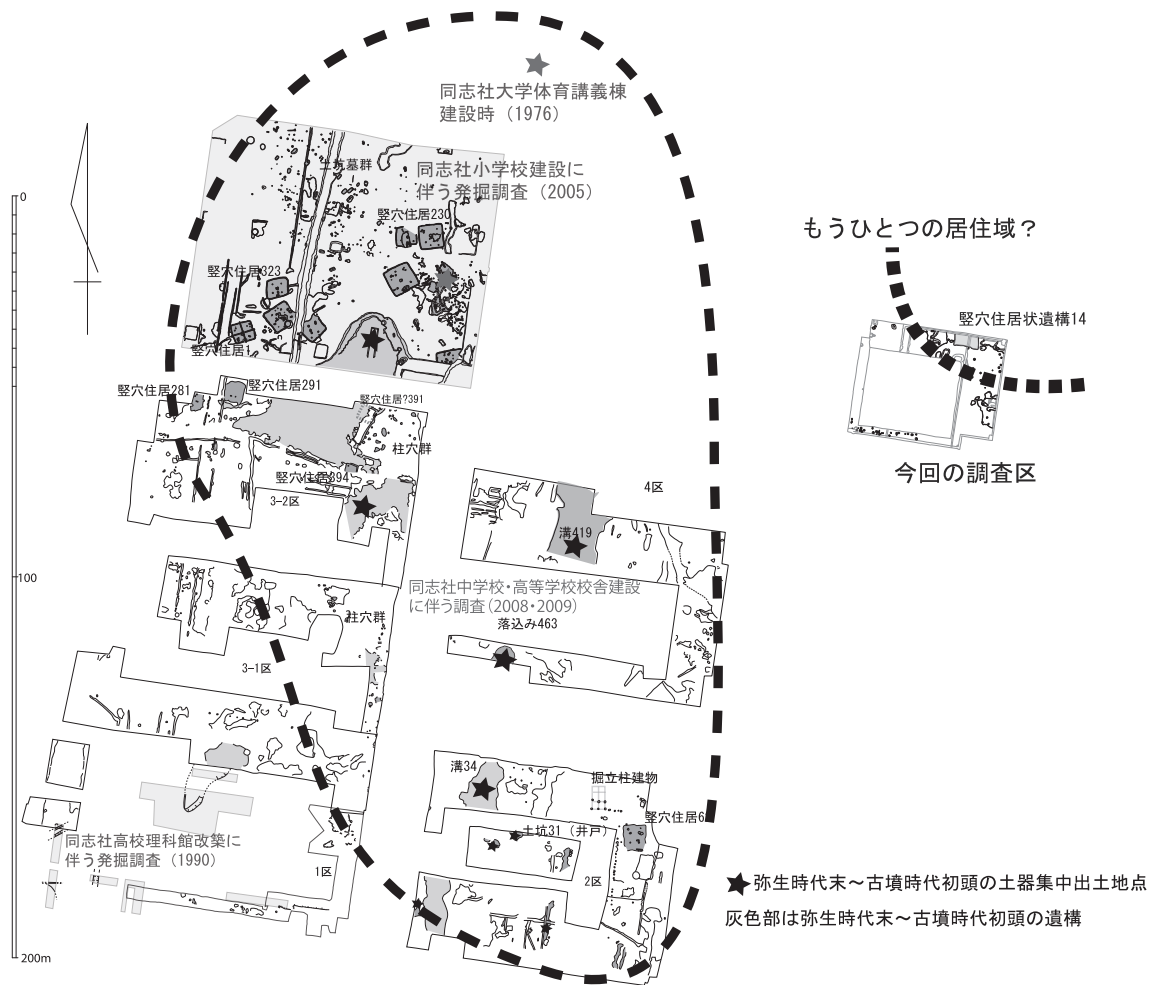


図6 古墳時代初頭の遺構の広がり

抄 録		
所収遺跡名	岩倉忠在地遺跡	
所在地	京都市左京区忠在地町 406	
コード	市町村番号	26100
	遺跡番号	364
北緯	35° 06' 79''	
東経	135° 78' 78''	
調査期間	2010年4月12日～2010年6月9日	
調査面積	564㎡	
調査原因	同志社小学校屋内運動場建設に伴う発掘調査	
種別	集落	
主な時代	弥生時代末～古墳時代初頭	
主な遺構	竪穴住居状遺構	
主な遺物	古式土師器・弥生土器	